

第2回小動物診療実態調査ワーキンググループの会議概要 (小動物臨床委員会小委員会)

I 日 時 平成26年7月8日(火) 13:30~16:30

II 場 所 日本獣医師会会議室

III 出席者

【総括】 細井戸 大成 日本獣医師会理事(小動物臨床部会長)

【座長】 佐 伯 潤 大阪府獣医師会理事(くずのは動物病院院長)

【委員】 田 中 綾 東京都獣医師会(東京農工大学農学部准教授)
松 原 勝 久 愛知県獣医師会(グリーン動物病院院長)

【本 会】 矢ヶ崎 忠 夫(専務理事)ほか

【(株)マクロミル】

高 柴 弘 行 マーケティングリサーチプロダクト本部
ソリューション部 2リサーチユニット
本 田 芙 美 マーケティングリサーチ営業本部
第4営業部 営業ユニット 1グループ

IV 議 事

- 1 前回会議の検討結果
- 2 調査計画の検討
- 3 その他

V 会議概要

(1) 冒頭にあたり、矢ヶ崎専務理事から大要以下の挨拶があった。

ア ご多忙の中お集まりいただき感謝する。各地の獣医師会では若い世代の入会率の低下が課題となっているが、新卒者の約半数が進路として選ぶ小動物診療分野に関して、これまで獣医師会として職域の安定や発展のための積極的な取り組みを進めてはいなかった。

イ 診療料金についても、平成10年の調査以来行われておらず、今回約15年ぶりに調査が実施され、さらに飼育者の意識調査も行われるということで、今後の具体的な施策の検討のもとになる貴重なデータが得られるものと期待している。

ウ 小動物診療獣医師の処遇等に関しては、一昨年に調査を実施したが、法人経営の施設と個人経営の施設との間で、また、診療施設の開設者と勤務獣医師との間で、大きな差が見られた。さらに、個人経営の施設では厚生年金加入率が15%程度しかなく、労災保険や雇用保険の加入率も70パーセント程度である一方、法人経営の施設では厚生年金加入率は約50%、労災保険、雇用保険については90%の加入率であった。これらについて、さらにサンプル数を増やした本格的な調査が実現できることを期待している。

(2) 事務局から出席者が紹介された。続いて、佐伯座長の進行により会議が進められた。

1 前回会議の検討結果

(1) 佐伯座長から委員各位に対し、会議に向けた検討資料収集への謝辞が述べられたのち、資料に基づき第14回小動物臨床委員会の会議概要が説明され、異議なく了承された。

(2) 診療料金実態調査の調査方法について、インターネットを利用したWEB調査を先行する一方、アンケート用紙を用いた紙面回答方式による調査も併用することが確認された。

2 調査計画の検討

(1) 診療料金実態調査、飼育者の意識調査のいずれについても、対象とする動物種は犬及び猫とするとともに、標題に「小動物」の語は用いず、「家庭動物(犬・猫)」とすることとされた。

(2) 調査において「犬」と言う場合は、体重がおおむね10kg程度の犬を念頭に回答を求めることとされた。

(3) 家庭動物(犬・猫)の診療料金実態調査について、細部の意見交換が行われ、以下について確認された。

ア 回答者である診療施設開設者に関する設問について、診療施設が法人経営か個人経営かを問う質問を追加する。

イ 診療施設全体の収入とともに、全収入に占める診療収入以外の収入(療法食をはじめとするフードや物品の販売、トリミング、ペットホテル等)の割合についても調査する。

ウ 検査費用については、一般に院内で行われるものに絞り、「スクリーニングのために行う検査の費用」といったように、飼育者の立場から、「具合の悪い動物を動物病院に連れて行って最初に一般的な検査を行った時の費用」がわかりやすいようなとりまとめを目指す。

- エ 調剤料については、設定の有無を聞き、設定している場合に一回ごとにカウントするか1日単位か等、課金方法を問う。
- オ カテーテル留置の項目については、血管確保を筆頭項目に置き、鼻カテーテルは酸素吸入用とする。
- カ 前回調査で気道カテーテルとしていた選択肢は気管切開とする。
- キ ICU管理とともに項目立てされていた酸素吸入については削除する。
- ク 安楽死処置については、行っているかいないかを問う。
- ケ 循環器関係の手術に関し、右大動脈弓遺残は除外する。
- コ THR、TPLO、TTA、開頭術、PLDDは小項目から削除する。
- サ 脳波検査の項目は削除する。
- シ 内視鏡検査の次の項目としてCT検査を追加する。
- ス 健康診断については「1日ドック」として項目を起こす。
- セ 剖検の実施の有無を問う。
- ソ 解答用紙の階級の設定については細井戸理事を中心に再検討し決定する。

(4) 家庭動物(犬・猫)飼育者の意識調査について、細部の意見交換が行われ、以下について確認された。

- ア 調査対象者はマクロミル社のモニター回答者とし、サンプル数は3,000を目安とする。
- イ 設問設計はマクロミル社において行うものとし、本ワーキンググループの意見を反映させることとする。
- ウ 複数飼育者の場合は、犬、猫それぞれについて飼育頭数を問う。
- エ 飼育している動物の年齢(複数飼育の場合は最高齢の動物の年齢)を問う。
- オ 動物を飼育していて良かったこと、良くなかったことが飼育者の本音として浮き彫りになるような設問設計とする。回答を容易にするため、一般的な事柄についてはあらかじめ選択肢として用意する。
- カ 動物病院への満足度や動物病院を選ぶ基準については、飼育者が動物病院に求めている事柄とその優先順位が明らかになる設問設計とする。回答を容易にするため、一般的な事柄についてはあらかじめ選択肢として用意する。
- キ 現在飼育している動物の入手経路についても問う。
- ク 動物飼育にかかる総費用と動物病院にかかる費用を問う。
- ケ 動物の治療にかけられると考える上限金額については、飼育者の価値観と密接にかかわる問題になるが、客観的なデータを明らかにする。
- コ 実際に動物を飼育している人の中で「動物を飼うのはお金がかかる」、「動物を飼うのは手間がかかる」とネガティブにとらえている人がどれだけいるかが見えるとよい。

VI まとめ

- 1 細井戸理事から、「今回の調査は今後の小動物獣医療の業界の在り方や対応策を考えるための重要な指標となる。小動物獣医療をめぐるっては、5年程前から動物の飼育頭数が減少している一方、動物の高齢化に伴う診療収入の増加で診療収入はそれほど減少し

ていないといわれる。しかし、1歳未満の動物が全飼育頭数に占める割合は急減し、従来の7%程度から4%程度にまで落ち込んでいる。これは近い将来大きく飼育頭数が減少することを示唆しており、業界全体の危機を表している。人の高齢化社会が進む中、動物との暮らしが健康寿命の延長に寄与するというような科学的根拠が、学際的な協力関係の中で示されることを願っている。今回実施する飼育者の意識調査がその一助になることを期待している。」とまとめられた。

- 2 佐伯座長から、今後メール等で意見交換を継続し、調査票の取りまとめを進めることについて協力が依頼され。会議を終了した。